

拜啓「ガダルカナル　タカ」様

“ほんとうに私の人生で、あれほど人がカッコよく見えてきたのは、あとにも先にも、あの時のあなたがおそらく初めてと言ってもいいくらいだと思います。”

あなたのような、私と同じバカヤローに、こうして手紙を書くのは少し照れくさいところがありますが、あえて書かしてもらいます。というよりは、むしろ書かしてくださいと言ったほうが正しいかもしれません。

私は年がいもなく、そして同業者として、あなたのカッコよさにしびれてしまいました。カッコイイという言葉は、単なる見かけだけを言ってるように聞こえるところがありますが、ほんとうに人が人をカッコイイと思うときは、見かけだけじゃないことを知らされました。あなたと出会って、ある仕事をして、カッコイイという言葉はその人の心意気のあり方を言ってる言葉だということをお教えられました。

それは、今でもはっきりと覚えています。結果的には終わってしまう直前の『元気が出るTV』の浅草ロケのときのことです。レギュラー陣全員で屋形船に乗り、宴会を楽しもうという企画でした。情緒にとんだ企画でありながら、その情緒を感じる余裕がないほどまだまだ寒く、風のきつい日だったと思います。ロケが進み、ある指定された川沿いの場所で、番組の呼び掛けに応じ、思

い思いのボールを持参して集まってきてくれた一般の人たちと、そのボールを使って賞品付きのあるゲームをして遊ぼうというコーナーの場面でした。我々レギュラー陣も、その屋形船の屋根の部分に設けられた、結構あがってみると高いデッキの上にあげられました。そして、そのコーナーのしきりをまかされていた私が、あれやこれやと参加者になんとかその場の雰囲気盛り上げようとしやべっている最中のことです。いきなりあなたは私のマイクを取り上げ、川を隔てた参加者に注意を呼びかけました。「興奮して川に落ちないようにから、夜の隅田川に自前の衣装を着たまま、見事に落ちていったのです。同業者として、私にはわかりました。最初、私のマイクを取り上げしゃべりだしたときには、なにをしようとしているのか一瞬戸惑っていたのですが、あなたのおかたをたくらんでいるお笑い独特の目つき。そして少しずつではありますが、徐々にしゃべりながら前のほうに進んでいくあなたを見て、とっさにこれは自ら川に落ちようとしていることを、私は察知しました。そして落ちる瞬間、その一連の動作の中で、あなたは私にマイクをあずけるようにして落ちていったのです。私はそのマイクを一瞬の間に当然のように受け取りました。これはもう、あうんの呼吸です。まるで打ち合わせしてたかのような、段取りをふんだような、コンビネーションでした。

私が同業の分野でないタレントなら、おそらくあなたのたくらみを気付かず、あなたはマイクもろとも、もしくはデッキの上でそのマイクを放り投げるようにして落ちていったことでしょう。はっきりいって、あの時のあの現場の雰囲気はその空気からしてあなたがそういうことをしてもギャグとしていわゆるウケるといふ状況では限りなくありませんでした。それでも体を張ってまだまだ底冷えするような川の中に、あなたは飛び込んでいったのです。そしてあの時の現場の雰囲気通り、そういうことをしたからといって特別にすぐウケたという状況にはなりませんでした。

しかし、私は同業者としてあなたのその捨て身のギャグになぜか「やられた」と思いました。そしてそのあと、これはもう芸人としてのサガがそうさすのでしよう。私はあなたを助けるような顔をして、自分自身も飛び込むことを考えたのです。しかし、ハンドマイクは放り投げることができても、私の衣装にピンマイクが付いています。私が飛び込めば、そのマイクは使いものになりません。いくらギャグといつても、結構高価なマイクをダメにしてしまうのは、やはりタブーです。そんなこんなが一瞬の間に私の頭の中を駆けめぐり、結局飛び込めませんでした。そして私はくやしいくらい、どうしてか分かりませんが、何か負けたような気分の中で、もう一度あなたに「やられた」と思ったのです。

しかし、その気持ちと同時に私はしびれるほど、そしてまるで感動するかのように、あなたが同じ芸人としてカッコよく見えてきたのです。不思議な感情でした。ほんとうに私の人生で、あれほど人がカッコよく見えてきたのは、あとにも先にもあの時のあなたがおそらくはじめてと言っていいくらいだと思います。どうしてあなたみたいなバカヤローが、そんなにカッコよく見えてきたのでしょうか。そんな気持ちが湧いてきた自分がくやしいくらいでした。

おそらく私は、あの寒い川にウケないのを覚悟で飛び込んでいったあなたの、お笑いに対するスピリットはもちろんのことですが、たぶんそれ以上に、その背景にあったあなたの師匠の看板番組をなんとか盛り上げたいという、あなたの弟子としての思い、そしてそのうえに、またあの日のロケがどういうわけか全員のノリもよくなり、企画のよみほど順調に収録が進んでいませんでした。そんな背景の中で、弟子としてここはなんとかしなければという、師匠を思う気持ち、番組を思う気持ちベースになったあなたの男としての心意気を、あの捨て身のギャグに感じたから、あれほどくやしいくらいあなたにしびれてしまったのでしょうか。まさしく、あれは厳密に言えば、単なるギャグではなく、あなたのビートたけしの弟子としての師匠を思う心意気です。そしてそれは、魂です。ソウルです。見事なロックスピリットです。

あとであなたに聞いたところ、もうデッキにあがるときには自分のピンマイ

クははずしていたということでした。もうデッキにあがる時点で、あなたはやる気になっていたということです。計画していたということです。それを聞いて余計しびれてしまいました。ほんとうに、あなたのあの時の心意気には頭が下がる思いがします。我々の世界でよく、ステージに上がる前に先輩に「勉強させてもらいます」と言っておがる習慣が今でも行くところに行けばありますが、まさしくあの時は、あなたに勉強させられたような思いがしました。

あれ以来、同じバカヤローでも、あなたのことをとても好感を持って見えます。あなたの心の中にある、お笑いの人間としてのスピリットと、師匠を思う心意気に、かげながら素直に、すばらしいと拍手を送っています。

元気が出るTVの終わりが内密に決まり、最後に恒例の飲み会となった元氣御用達のすし屋の席で、松方弘樹さんにすすめられた、まるでウーロン茶のようにコップいっぱいにな々とつがれたヘネシーロックを一気に飲み、最後は泥酔してしまい、私の隣にたけしさんがいるにもかかわらず、私に向かって「島崎さん、俺はこのおやじ（たけしさん）をはやくラクにしてあげたいんですよ。でも自分の力が足らなくて。俺は、それがくやしんですよ」と何度も何度もまるで叫ぶように話していましたね。そしてまた、「このおやじ（たけしさん）、

フライデーで捕まったとき、連行されながら乗ったエレベーターの中で、俺たちにドカタしてもおまえらを食わしてやると言ってくれたんですよ」そ

んなことも言っていましたね。そして、そんなセリフのあと、まるで少年のように人目もはばからず男泣きしていましたね。あの時のあなたは、聞いてる人間の心まで素直にしてしまう何かがありました。そして、それと同時に私はあの時のあなたの叫びは、酒の勢いの中でセンチな気分が言わしたセリフとは思えませんでした。あなたの叫びは、あなたの心の中にある師匠への思いの、まぎれもない本音だと思いました。

ガダルカナル　タカ様、私はなぜかよく分かりませんが、あなたの芸の中には簡単に見せようとしない、でもあなたにも確かにある、そういった人間くさいペースな部分に拍手を送っています。それは、芸人として、人間として、あなたの生き方やそのあり方に、私自身が共感を覚えたからでしょう。あなたは私にとって、五十になっても、ときどき一緒に仕事をして、最低なことをやったりバカをやったり、お互いに足をひっぱったりして、楽しみながら仕事をしてみたい芸人の一人です。これからも、よろしく・・・。

追伸

ガダルカナル　タカ様、こんな照れくさいことをあらためて書いて、申し訳ありません。お許し下さい。あなたという大馬鹿者に対して、あまりにもキレイに書きすぎてしまいました。書き終わったあと、そんなに言うほどすばらしいものじゃないと、あなたというこの恥知らずに失礼なことをしたと、あらた

めて反省しております。

今は、くやしかったらポコチンでも見せてみるという気持ちでいっぱいです。今度お会いしたら、おわびのしるしに唇でも思い切り吸わしてもらいます。それでカンベンしてください・・・。

失礼が当たり前なあなたへ

ポコチンの大きさでは負ける私より